

「ルイ・ランベール」小論

黒崎靖子

はじめに

△この「ルイ・ランベール小伝」⁽¹⁾は、私がゲーテおよびバイロン、ファウストおよびマンフレッドと覇を競おうとした作品である。V（一八三二年七月、妹ロオルへの手紙）

△人間喜劇V中の△哲学研究V部門に属し、△追放者V、△セラフィタVの二作品とともに△神秘の書Vを構成しているこの中篇小説執筆にあたって、バルザックはこのように述べている。幼少から認識の情熱に憑かれ、その探究に全生活を集中して後発狂する青年思想家の物語によって、バルザックは小説ジャンルに始めて天才の神話を作り△ファウストVの作者に挑戦しようとしたのである。一八三二年、彼の創作生活が一つの開花期を迎え、あらゆる方面に多彩な活動を行い自己の可能性を探っていた年である。また、この頃、△オーベルマンVに深く感動したバルザックは、半ば自伝的形式を用いることにより、この作品において、自伝小説を書こうとい

う願望をも果たした。それ故、一八三二年から三五年にかけて、すなわち、模索の時期から、人物再現の手法とレアリズムの美学とを発見し△人間喜劇Vの構想を整えた時期にかけて、苦しい推敲を重ねて書きあげられたこの作品は、バルザックの重要な問題をふくんでいる。

バルザックの作品に見られる著しい哲学への趣味は、とりわけ修業時代のバルザックを支配していた傾向である。イデオログの影響下に書かれた十八〜十九才の時の△哲学ノートVに始まる、△ステニーV、△ファルチュルヌVなどの一連の初期作品は、バルザックが文学生活を始めるにあたってまず哲学者であること、人間と世界とを解釈する独自の哲学を形成すること、自己の使命としていたことを物語るものである。この哲学的探究のあらわれとして彼の作品には、△ルイ・ランベールVの同名の主人公に結晶する知的タイプ的主人公が生み出された。△ルイ・ランベールV完成の年一八三五年は、同時に△ゴリオ爺さんV成立の年であり、この後の△

Hans balzaciens には、このようなタイプの主人公はもはやあらわれないように見えるが、彼等はより現実的な主人公の中に融合されているのである。例えばハ人間喜劇V中の天才作家ダニエル・ダルテスにおいては、ランベールの哲学的形而上学的性格がその性格の一面を形ずくっている。ハルイ・ランベールVは、バルザック研究の上で、バルザックの思想とその形成の問題を解くため重視される作品であるが、小論では主人公に関する問題をとりあげてみたい。すなわち、バルザックの *influence* な主人公である一連の人物たちの代表をなすものであり、バルザックの知的生活と心理的体験とを反映しているこの主人公の探究と性格と運命とを分析し、このような探究を必要としたバルザックの芸術、創作における問題を探つてみたい。

I ランベールの探究

(1) ランベールの生涯

作品は、二十八才の若さで人に知られることなく生涯をとじた天オリイ・ランベールの、異常なまでにはげしい知的探究の物語を、コレージュ時代の唯一の友である話者IIバルザックが後年回想して語る形式をとっている。まず、ランベールの探究の意味と問題を、彼の生涯の中にたどってみよう。ランベールの生涯は三つの時期に分けられる。

第1期 知的情熱の目ざめ、神秘的傾向

(ランベール五才〜十四才)

ヴァンドモアの皮なめし工場主の息子ルイ・ランベールの知的情熱は、五才の時、始めての書物聖書を手にして目ざめる。彼はこの

時からハ飽くことを知らぬ空腹Vのような読書の情熱のとりことなり、全生活を読書と夢想に集中してすごすようになる。このような生活によって、彼は天才的知力、一種の予言的力を身につける。また、彼のすぐれた想像力と記憶力は、外界遮断と自我への集中によってヴィジョンを現出させる。

ハ僕は時に好んで自分の前に幕をひくことがある。そうすると僕は急に僕自身の中に還る。そこには暗い部屋があつて、そこにはいろいろの自然界の出来事が、始め僕が外面的な感覚で知つた時の形式よりももっと純粹な形式のもとに再現するのだ。V

特に、彼が早くから神秘家たちの作品を愛好したことに注意しなければならぬ。彼はとりわけスエーデンボルグの天使の理論を好み、神秘家のような恍惚癖を身につけた。コレージュ・ド・ヴァンドームに入りその生活に適應しえず、心身にあらゆる苦しみを味わつたランベールは、思索と夢想の中に逃げこみ、ますます内閉的神秘的傾向をつのらせるようになる。すなわちこの時期のランベールは、本能的に、直観者、*visionnaire*, *voyant mystique* であつた。

第2期 学問への野心、システム形成の努力

(ランベール十五才〜二十二才)

十五才の時、ローションボー城への遠足の前夜、ランベールは夢の中で心身分離の現象を経験した。これによって彼は、人間は二重の生活を持ち、内面的存在が外面的存在にうちかつた人間の姿である天使において真の生活が始まる、というスエーデンボルグの天使の理論を、科学的方法によって実証し新しい人間学を樹立する可能性を見出す。その翌日から半年の間、ランベールは自己のシステム

の形成を目ざし、 $\wedge$ 意志論 $\vee$ 執筆に情熱をそそぐ。コレージュを出てからはパリに学び、近代科学の分析の方法によって $\wedge$ 意志論 $\vee$ を完成しようと努める。この時期のランベールは、合理主義的理論家、分析家である。

第3期 宗教的天職への転向、再び神秘家

(ランベール二十三才―二十八才)

しかし、ただ一通の手紙によって告げられるランベールの三年間のパリ生活は、現実社会への不適応や内心の相剋により、苦しみのみちたものであった。三年間の努力の後、絶望した彼は現実社会の中で生きることを断念し、学問への野心を捨て、スエーデンボルグ信仰にもどって、孤独な瞑想の生活により新しい時代の宗教の革新者になろうと決心する。しかし、パリから帰った彼は、初恋の情熱の中に発狂してしまう。

このように、ランベールにおいては、神秘家であった時期と合理主義的科学家であった時期とが交代してあらわれている。ランベールの探究は、幼少時代のヴィジョンを発展させシステムとして表現することを目ざしているが、彼はそのために直観・想像力と、分析・体系化という二つの相対立する方法によった。そしてこの二つの方法の対立からランベールの苦しみは生じている。二つの方法、すなわち唯心論の立場と唯物論の立場とを綜合し、自己のシステムを樹立すること、そこにランベールの野心、願望がみられる。

(2) ランベールの思想体系

$\wedge$ 意志論 $\vee$ 、パリからの手紙、発狂初期のランベールの言葉を集録した二つのシリーズの $\wedge$ パンセ $\vee$ 、これらの中にのべられてい

るランベールの思想は、バルザックの探究の結果である哲学の、最もすぐれた表現である。バルザックはランベールのように二つの方法を用い、一方では同時代の科学、特にメスマル、カバニス、ウィレ (J-J Virey) らによる医学理論と、ジョッフrow・サン・チレールの $\wedge$ 単一構成 $\vee$ 理論をとり入れ、一方ではスエーデンボルグ、ヤコブ・ペーメラ神秘思想家の理論をとり入れて、人間学を中心に社会学と宇宙論を網羅する統一的綜合的思想体系をつくりあげた。今、ここで、ランベールの運命との関連においてこのシステムを眺めてみよう。システムの人間学はまず主人公ランベールの上に適用されているし、また、こうして彼の思想をたどれば、後にとりあげる彼の神秘家としての性格の問題が明らかになるであろう。

タルチウスがそのすぐれたバルザック論で指摘したように、バルザックの思想は、人間の存在理由を精神力の中に認め、世界の創造の原理を単一構成として認める一元論的エネルギー体系を基盤としている。ランベールは、究極の一(彼によれば言葉でもあり神でもあるもの)が数と運動により $\wedge$ エーテル状実質 $\vee$ に変化し、 $\wedge$ エーテル状実質 $\vee$ が人間の頭脳の中に吸収されて $\wedge$ 意志 $\vee$ となり、 $\wedge$ 意志 $\vee$ が $\wedge$ パンセ $\vee$ を生み $\wedge$ パンセ $\vee$ が $\wedge$ 観念 (Idee) $\vee$ を生むという旋回システムをのべる。従って人間の精神力パンセの本体は $\wedge$ 物質 $\vee$ である。創造の原理は一 (unity) であるが、創造された世界においてはすべてが二の数であられる。すなわち精神界と物質界。生命とは $\wedge$ 作用 $\vee$ と $\wedge$ 反作用 $\vee$ との対立である。人間も、内面的存在と外面的存在、精神と肉体の二重の性質をもっている。人間

は、Homo duplex である。しかし、ランベールの天使の夢想と、その実在を証すものであるローションボーのヴィジョンに見られるように、人間のすすむべき道は、外面的存在Ⅱ肉体に内面的存在Ⅱ精神を優越させ、それに生命力を集中することである。これによって人間はパンセを觀念に変容させ、物質的世界をこえて精神の無限の世界に自己投影することが出来るのである。ランベールはパンセの本性と現象についての考察を熱心に行い、この力を駆使して、天使や殉教者たちの奇蹟が示すような、物質Ⅱ肉体の束縛を受けない非凡な力を持った自由な存在となり、世界を自己の中に把握しようとながう。それを実現する完全な認識力に達するためには、觀念の世界には、梯状をなす三つの段階がある。第一の本能域は最下位にあり、ほとんどの人間がこれに属し、生れ働らぎ死ぬ生涯をおくる。第二は人間の知性をあらわす抽象 Abstraction の域である。

Ⅰ抽象から社会が始まる。抽象から、法律、芸術、利害関係、社会思想が生れる。だが人間の最も完全な姿を示すのは、最上域のスペシアリテに属する人間である。スペシアリテとは、認識力の最高のものをあらわすためバルザックのつくった特殊な用語である。

Ⅱスペシアリテは物質界精神界双方のもつあらゆる変化を、その原因結果にわたって見るものである。……(Specialite の語源のラテン語 Species とは視覚、観察する、すべてを一目に見ることなどを意味し、同じく語源の Spectrum とは鏡とか、物の全体を眺めて鑑賞する方法とかを意味する) イエスはスペシアリストである。スペシアリテは直観を含んでいる。Ⅲ

各域の間に中間的存在というものがあ、天才は抽象と本能との間

に位置する存在である。天才とは、従って認識力の最高のもの、觀察力をふくみ予言の力を生むにいたる直觀的能力スペシアリテを獲得しようとするものである。その方法はⅡ意志Ⅲによって、パンセを内面的存在にⅡ集中Ⅲし、二重性の対立を克服することである。天才ランベールの生涯は、スペシアリテ追求の物語である。Ⅱあら皮Ⅲにおいてパンセの物質的な面、人間の生命に対する破壊的な面を示したバルザックは、ハルイ・ランベールⅢでは、パンセの精神的面を追求し、Ⅱ思惟するには先ず意^{おも}はねばならない。Ⅲと意志をパンセに先在させることによって、人間の精神力・知性の物質に対する勝利を示している。

edition critique によれば、一八三二年Ⅱあら皮Ⅲのテーマの発展という形をとっていたこの作品に、バルザックは一八三五年、作品の性質を変えるにいたった大きな修正を加えている。すなわち、神秘宗教、特にスエーデンボルグに熱狂したバルザックは、この作品を、新しい時代の宗教として神秘宗教をひろめ、フランス文学史上始めての神秘宗教の詩的表現を旨とするものであるⅡ神秘の書Ⅲの中に入れ、この作品とスエーデンボルグの思想とのつながりを強く示そうとした。しかし、ランベールの本質をなしているのは認識の欲求・権力意志であり、その思想は occultists の伝統に属するとされているものである。Ⅱランベールがシステムのために引用したものをみると、科学に対しても一つの傾向があり、魔術学、占術、占星術、降霊術といった Sciences Occultes が支配的位置を占めている。Ⅲハルイ・ランベールⅢにおけるスエーデンボルグの役割は、天使の理論がビュフォンの人間二重性論やスペシアリテの理論に、

Correspondance の理論がアナロジによる単一構成の理論に呼応して用いられているにとどまる。バルザックは、そのフォルマシヨンの最終期に、彼自身の思想と多くの類似点をもつスエーデンボルグをとり入れることにより唯物論を基盤とする彼の思想にモラル的意味を付加し、全体性・総合を目ざすシステムを完成したのである。

II ランベールの運命

(1) ランベールの狂気について

ランベールの探究の物語は、彼の内心におけるはげしい苦惱を示したパリからの手紙で突如とぎれる。コレージュを出て十年の後、話者はランベールの叔父に会い、その発狂を知らされる。そして、許嫁のポーリーヌの献身的看護の下に廃人となって生きているランベールを見る。この間話者の心を支配するのは、目のあたりに見てもランベールの狂気を信じがたい思いである。ランベールの過去の生活を回想すると、狂気は必然的な運命であったと考えられるが、彼のようなすぐれた頭脳の陥った狂気とはどういう現象なのか？話者の疑惑は婚約者の狂気を信じようとしないうる崇高な女性ポーリーヌによって強く支持される。彼女はランベールを説明して言う。

「あきつとルイが気狂いのようにお見えでしょう。しかし狂気ではございません。狂気とは、何か知らぬ原因によって脳が侵され、正気の行いをしなくなった人のことを申します。私の夫はあらゆる事がみな完全にもちんとしております。夫は肉体から脱れ出ること成功し、何か見知らぬ他の姿で私どもの目の目に映じているのです。話す時には、非常にすぐれたことを申します。ただほとんど常にそうなのですが、心の中に萌した考え

を言葉で仕上げたり、言葉の中に萌したものを心の中で仕上げたりするのでございます。V

ポーリーヌの言う意味は後の問題として、まず話者によって与えられている解釈を見よう。

バルザックが天才を「恐るべき病V（「幻滅V」、「頭脳の畸型V（「芸術家論V）」とよぶとき、天才とは、パンセのエネルギーの集中による異常な生理的状态を意味している。

「天才とは、結局、時と金と身体をくいつくして、悪性の情熱よりも一層すみやかに人を破滅に導く不断的乱行ではないだろうか。V（「絶対の探究V）」

ランベールも、その異常な情熱、思索の性質、生活態度のすべてにより、始めから破滅の印をきざまれていた。彼は「自らの中に開いた深淵V」とも言うべき情熱に導かれて、身を滅すまでの知的活動を行った。その頭脳集中の生活は肉体を虚弱にし、コレージュ時代のランベールは女のような繊弱な肉体をもったえず病に苦しんでいた。また彼の知性の「思惟が思惟に反動する闘いV」は、彼を消耗させる極度の緊張を常に生んでいた。さらに致命的な神秘癖によって、ランベールの過敏な感受性はあらゆる現実と鋭く対立し、恍惚の習慣は神経性カタレプシーの素地をつくっていった。このように破局へと向いつつあったあらゆる要素の最後のものとして、ポーリーヌへの情熱が加わった。パリでの生活に絶望した後、ランベールは彼女の中にかつての夢想であったスエーデンボルグの天使的女性の姿を見出し、この情熱に全生命をかけた。しかし、ランベールは恍惚感と絶望との間をたえずゆききする不安定な精神状態に陥り、

ポリーリスの愛と幸福とを約された時はげしい官能の欲望にとらえられ、カタレプシーに陥り、不能を感じて絶望し、ついに結婚の前日発狂してしまう。

このように描かれたランベールは、 $\wedge$ あら皮 $\vee$ による公式、近代社会においては知的情熱であるパンセが人間破壊の最大の力となり人間を殺すものとなるという、*usure vitale* の理論のすぐれた小説化を示すものであるが、精神医学者たちの注目をしばしば受けてきた⁽⁹⁾。彼等はランベールを典型的精神分裂病患者であるとしている。その一つ、クロードおよびレヴィ・グワランシ共同の研究によれば⁽¹⁰⁾、ランベールは精神分裂病患者 *Schizophrène* への症状の段階を正確にたどっている。幼少時代のランベールは、その知覚の鋭さ、ヴィジョン、外界遮断・自閉の傾向、肉体的特徴、ナイフのエピソードに見られる異常感覚などにより、第一症状の分裂的傾向 *Schizoidie* をあらわしている。特にローションボーの心身分離の夢は、この時期の患者の特徴をなす願望であるという。コレージュ時代からカタレプシーに陥るまでのランベールには、幸福、不安感を伴う興奮とメラニコリックな意気銷沈とが交代してあらわれる、第二症状が見られる。そして狂人ランベールは、カタトニー症、早老の容貌、数と運動についての臆想（ $\wedge$ パンセ $\vee$ に見られる）により、精神分裂病患者の特徴を示している。特に注目されるのは、ポリーリスの言葉に示されている、ランベールの知能の支離滅裂は外界との不調和によるうわべだけのもので脳に損傷はないというバルザックの判断であり、彼らはこの予言的卓見によって、バルザックを、精神分裂病という病名を創始した精神病学の泰斗フロイドの先駆者で

あると讃えている。

(2) ランベールにおける心理的二重性の問題

このようなランベール像のモデルについては、さまざまな資料があげられている。バルザックはこの名をコレージュ・ド・ヴァンドームの同窓の友 *Theodore Louis-Lambert Trianon* からとっている⁽¹²⁾が、この人物との関連がどの程度のものかは明らかでない。ランベールは、ユゴーの兄ウィージェニス・ユゴーと細部において類似しているとも言われる⁽¹³⁾。またバルザックは狂気に関する理論を、彼の知己であった医師たち、特に、 $\wedge$ 「*Irritation et la folie*」(1828)の著者ブルセから得、市民病院の患者たちを観察してランベールを描いたということも考えられる⁽¹⁴⁾。もとよりそのいずれもがバルザックのために役立てられたであろう。特に最後のものはランベールの実在性、迫真力を生み出すのに大きく寄与したことであろう。しかし、ランベールは、既述したように、バルザックの知的生活と心理的体験とを托されたバルザックの *intime* な主人公である。殊にランベールの思想は、バルザックの思想に一致するものである。そのランベールの思想と性格と生活と知能に関するすべてが、専門家により精神分裂病患者のものとして診断されていること、そこに大きな問題を見出さぬわけにはいかない。

$\wedge$ ステニー $\vee$ の主人公ヤコブ・デル・リエスに始まるランベール以前の知的主人公たちに見られる問題の中心は、思想における唯物論と唯心論との対立、およびその源である二重性をなす気質、心理的苦惱というテーマである。このテーマがランベールにおいては、科学的な裏づけによって病理学的心理分析にまで発展している。ラ

ンペールが認識の探究に用いた二つの方法は、彼の中にある二つの傾向——夢想・想像力による現実からの解放のねがいと分析・組織化を好む現実への愛好——のあらわれである。外界を遮断し自己の内部の世界で理想の生活を営みながら、未知のものを詩化する神秘家たちの表現法にあきたりないランペールは、より真実な論理的な表現法を科学の分野に求める。だが科学による方法をえらんだその瞬間から、彼は自己の内部に生ずる相剋を予感する。

△ああ、もし僕が幻想を失うとしたら、僕は泣かすにはいられないだろう。僕には、二重の性とスエーデンボルグの天使とを、どうしても信じていなければならない必要があるんだ。この新しい学問はそれらのものを殺してしまうだろうか？

△幻想の中に生きようとすれば現実の中へひきもどされ、現実の中では幻想に固執し、ランペールはついに△意志論Ⅴを完成することが出来ない。学問への野心は挫折し、ランペールは宗教の名のもとに理想の生活を生きようとするが、ここでも捨てがたい現実への執着が彼の心を苦しみにひきさく。ランペールはボーリーヌにこの内心の苦悩を訴えて言う。

△僕は自分の心の性質から、不可避免的に幸福のよろこびにも浸りますが、そのよろこびを分析して滅してしまふ恐ろしい透明な反省にも浸るのです。僕は障碍をも成功をも同時に見透す悲しい能力を恵まれていて、その時々^のの思い込み方によって幸福にも不幸にもなるのです。Ⅴ

ランペールはボーリーヌへの愛に全生活を集中することによって、二重性の対立の克服、内的統一の実現をねがうのである。

ランペールにおいてはげしい対立と緊張を生み、精神分裂という結果にまでいたった、現実へ向う性格と理想への憧れというこの二つの極性、それは、作品を通じ書簡を通じバルザック自身の中に見出されるものである。官能のよろこびを求める一方禁欲的生活をねがいとし、鋭い観察者でありながらヴィジョンにひたり、科学的厳正さをもつ哲学を求める一方想像力による自由な解放をねがう、無限の矛盾と対立。バルザック自身にとってもこの性格は謎であった。

△私の性格は私の知る限りの最も風変わりなものだ。……私はこの五フィート二インチの体の中に、ありとある不統一、矛盾をもっている。……何ものも私自身以上に私を驚ろかせはしない。Ⅴ

△意志論Ⅴの中に説かれ、バルザックの全作品にみまぎっている強力な意志力こそ、彼の性格と心理の中に深く根ざしている二重性を均衡の中に支え、彼を破滅の運命から救ったものであったが、二重性の相剋による苦悩は、消耗の意識、時には発狂の予感となって彼につきまとっていた。自己の破滅を予感するランペールの口調は、バルザックの書簡の中にそのまま見出される。二重性の人間、パンセによる *usure vitale* の理論、単一構成論などのバルザックの思想はすべて、このような彼の内的生活との関連から形成されたものである。特にそれは彼のつくった人物たちの心理の中に投影された。ルイ・ランペールはその最も深い、すぐれた表現であるが、△人間喜劇Ⅴの多くの人物たちはこの心理的二重構造により、すべて多かれ少なかれ分裂病的であると言われる。

III 神秘家ランベールの意味するもの

(1) ランベールの神秘的結末

一八三五年、ハルイ・ランベールVの神秘的傾向を強くうち出したバルザックは、狂人ランベールは、ハ自らのヴィジョンに向つてすすむ *voyant* V¹⁶ にはかならぬことを示した。ヴィルノワ城の暗闇の中に昼夜立ちつくして一心にヴィジョンを追っているランベールは、肉身を脱して内面的存在となりきった、かの天使の化身を意味する。現実世界の人間は彼の観念の高みまでにとどって行くことは出来ず、彼はまた自己のヴィジョンを伝達する意志も能力も失っている。ランベールの狂気とは、この伝達の断絶に対し世人が与えた名称であるにすぎない。バルザックは、この年書きあげた神秘的両性具有の天使の物語ハセラフィタVと内的関連をもたせて、ランベールをも天使の物語として描くことによつて、彼をパンセにより破壊する悲劇の主人公から精神的勝利者へと転換させた。ランベールの天使への化身は、ボーリーヌへの愛を契機として行われる。それはもはや彼を破壊へ導く情熱ではなく、ハセラフィタVやハ谷間の百合Vに描かれているように、神秘的渴仰のイマージュとしてあらわれ、神への渴仰と人間的愛への欲望との間の苦惱を味わせ、苦惱による内的緊張のきわみにおいて人間を地上から天界へ飛翔させる天使的爱である。

だが、ランベールにおけるこの天使の物語の真に意味するものは何であろうか。ランベールの場合、セラフィタのような信仰生活の要素は稀薄である。ランベールの天使化身の夢とは、実のところ、人間の能力の限界を見きわめた天才の超自然的力の発現への憧れで

あり、二重の性を超えて内面的生活に集中し、純粹観念と化して観念の最高域のスペシアリテに入ろうとする欲求なのである。そしてランベールの神とは、世界を構成する根本的存在であるハ一Vのシノニムである。それ故ランベールのあらわすものは、神と自己との融合という神秘家のヴィジョンではなく、バルザックの、知性による現実からの解放、自我集中の生活、権力獲得といった夢なのである。

ところで、ランベールの追求するスペシアリテという、観察・直観・予言をふくむすぐれた認識力は、バルザックがその芸術論においてハ第二の視覚 *Seconde vue* V あるいはハ魂の鏡Vという名のもとに、芸術家における天才の能力をあらわすものとして考察しているものである。

ハ真に哲学的な詩人や作家には、説明しがたい一つの精神現象、真実をそのあらゆる状況のもとに透察することを可能ならしめる一種の *Seconde vue* が生じる。V (ハあら皮序文V)

バルザックにおける天才はすべて、一つの型—スペシアリテ *Seconde vue* の持主、あるうは *voyant* とよばれる予言者—に帰する。この問題が最も熱心に展開されるのは、当然芸術という領域においてである。想像力、夢想、感受性などの詩人的性格と問題とをもっているランベールは、特に、生涯をかけて追求したスペシアリテの獲得を狂気・沈黙により示すという運命において、フレンホーフェル、ガンバラとともにバルザックの芸術論における大きな問題をあらわしている。一八三七年、音楽をテーマとする芸術小説ハマッシミラ・ドニVを書いた時、バルザックは、ハルイ・ランベ

イルV、ハガンバラV、ハマッシミラ・ドニVなどの作品は、ハ知られざる傑作Vに始まるハ創造力の過剰によって殺される作品、制作Vというテーマを、それぞれ描いたものであることを指摘した。⁽¹⁷⁾そこで、最後にランベールの物語を、バルザックの芸術論、芸術家像との関連から眺めてみたい。

(2) 芸術制作におけるハ発想と制作との分裂Vのドラマ

ランベールの探究と生涯には、当時の知識界の動向の反映とみられる、バルザックの知性尊重・信頼の念があらわれている。ハルイ・ランベールV執筆当時、バルザックは、ゲーテ亡き後のハヨーロッパ精神界を支配するVことを夢みていた。バルザックの芸術論もこのような視点に立っている。芸術とはハパンセの濫用Vであり、パンセの表現形式、認識の一形態である。芸術的天才とは *l'evenement* とパンセの新しい総合とを行うものであり、真の芸術家は、目に見える形相のみには満足せず、*chasse des idées* に従って、自然の中に隠されている目に見えぬ秘密の原因、創造の原理をさぐるうとする。

ハ芸術家の使命は自然を模写することではない。自然を表現することだ。……我々は事物の精神を、魂を、特徴をとらえなくてはならない。V（ハ知られざる傑作V）

この形而上学的探究とその作品への表現によって、芸術家には、神の使徒として真理を伝え人類のモラルを導くという、高い位置が与えられる。凡庸な成り損いから天才にいたるまでのあらゆる範疇に属し、それぞれのドラマを展開しているハ人間喜劇Vの芸術家たちの中で、絵の中に生命を表現しようとする画家フレン・ホーフエ

ル、歌劇によって民族の生命を表現しようとする作曲家ガンバラは、芸術家の最高の使命をはたすべく形而上学的探究に従う人々、ハ自然の秘密の強奪V、ハ神の力の略奪Vを目ざすプロメテウスの野心家たちである。彼らは、一切の欲望、享楽の誘惑をしりぞけ、確固たる信念をもってその生活を唯一の情熱である制作に集中する。しかし、苦しい努力を重ねた末に狂乱に陥り、未完成の作品を抱いたまま破滅するという悲劇的運命が彼らをとらえる。

一八三〇年のハ芸術家論V、そして最後の傑作ハ従妹ベットVの中に、これらの芸術家の運命をあかす芸術制作の内的条件に関する理論がべられていく。ここでも基盤となっているのは、パンセの理論であり、ハパンセを濫用するV芸術家におけるパンセの破壊的作用である。まず、芸術家はハ自己に属するものではない。V彼は、パンセという専制的な気まぐれな創造エネルギーにほんろうされる奴隷にすぎない。パンセにはんろうされこれをとらえることの出来ない芸術家は、怠け者、人間のハ死骸Vである。コケットな女を追いかけようとするパンセとの格闘に、天才と努力と幸運により芸術家が勝利を得たとする。すると今度は抽象の誘惑、観念の誘惑が不可避免的に彼らを待ちかまえている。芸術家は *Chasse des idées* において、阿片吸飲の生む幻覚にも似た恍惚のよろこびを味わい、現実の一切を忘れて夢想にふけるようになる。⁽²⁰⁾ フレン・ホーフエは言う。

ハわしのあの絵は絵ではない。感情だ、情熱なのだ。……わしはまだ画家である以上に恋人なのだ。V

恋にひたるように観念に酔う芸術家においては、認識したものを

表現すること、觀念を形の中に具象化することが不可能になつてしまふ。なぜなら、芸術における制作とは夢想や陶醉とはほど遠いもの、氣まぐれなパンセをとらえ育くむには母親の子を育てるような不断的努力と忍耐とを必要とする仕事だからである。芸術は、人情ではなく頭腦を用いるものなのだ。こうして、高い使命の実践のためあらゆる困難に屈せず敢然と立ち向う真にすぐれた芸術家において、⁽²³⁾ 発想と制作との分裂⁽²⁴⁾により、表現の不可能という悲劇がおこる。フレンホーフェルは、完全の美の実現を夢みつつ滅茶苦茶に色をぬりたくって彼の絵を破壊していく。夢想からさめた一瞬、自己の夢想と現実との隔絶に気づいた彼は、絵を焼いて自殺しなければならぬ。ガンバラは、天上界の音楽の妙なる和音と音を恍惚として語りながら、考えられる限りの不協和音をかなでる。自己の迷妄からさめきれぬ彼は、流しの音楽家に身を落す。

バルザックはこの悲劇を、⁽²⁴⁾ 創造者であると同時に創造物である⁽²⁵⁾ ヲ芸術家の運命であると考えた。人間の能力の限界を超えて神の領域にふみこんだ彼らは、キリストのように血の償いによつてのみ祝聖される。それ故フレンホーフェル、ガンバラは単なる挫折者としては描かれない。フレンホーフェルの色彩の混沌の中からは、生命にかがやく女の片足がのぞいていた。ガンバラの工天した奇妙な⁽²⁵⁾ 八万能楽器⁽²⁶⁾ は、最も純粋な甘美な音楽をかなでることができた。不可能な理想を可能ならしめようとする野心はこのような形でのみ実現される。かのスペシアリテに達し、世界を、創造を自らの中に把握した彼らは、発想においては誤つていなかったが、表現手段として不完全な人間的手段しかもつていないために、神の如き創造を

行うことは出来ない。彼らの作品は未完成のまま埋もれるしかない。世界の解明とそのシステムによる表現とを目ざしてあらゆる努力をそそいだ後、突然言葉による表現をやめ、神秘的沈黙の生活に入るランペールは、このスペシアリスト⁽²⁶⁾ *Volant* である芸術家の、破滅の中に一すじの光明をとどめた姿の、最も崇高化された表現と言えよう。しかし、ダニエル・ダルテスのように、意志力によつてあらゆる困難にうち勝ち、あらゆる成功、栄光にかがやく芸術家の姿を描いたバルザックにとつて、彼らは真の理想像ではない。これら一連の主人公たちの中に描かれた芸術家における觀念、抽象の誘惑の問題、そしてその結果の⁽²⁷⁾ 発想と制作の分裂⁽²⁸⁾ による表現不可能の問題は、バルザック自身の *impossible* な問題をあらわしているのではないだろうか。自伝的な知的タイプの主人公であるランペールの物語が、そのことを示しているように思われる。

(3) ランペールにおけるバルザックの創作の問題

芸術創造のメカニズムを二つの要素の対立として考えること、ここに、バルザックの根本をなす問題であつた二重性と二元論の最も深刻なすがたが見られる。統一へのねがいと同じはげしさで、バルザックの思想と生活は二重性に支配されていた。表現手段にしても、人間に許されるのはコントラストの手法のみではないか、とバルザックは考へる。⁽²⁵⁾ 一切のものを対立・矛盾のままに包含しようとする態度は、複雑な社会相と人間の生活・心理とを生のひろがりの中に描くことを彼に可能ならしめたが、同時にそこから彼の内心における相剋も生じた。

ランペールの生活は理想性の極限をねがう少年のヴィジョンに始

まる。彼は本能的直観力と想像力とによつてそこに現実とは別の生活を作りあげ、神秘家のような恍惚にひたる。ランベールやフェリックス（ハ谷間の百合）の幼少時代を描く時、バルザックは、ほとんど宿命論者のように、彼らの性格・心理・運命を解く鍵を、その幼少時代の中に認めようとしている。ランベールの生活は、幼少時代のヴィジョンの發展である。やがて彼の中に、ヴィジョンを表現しようとする意志が生れるが、その瞬間から彼は神秘的よろこびからひきはなされ、苦惱の生活の中に投げこまれる。なぜなら、彼の中に存在する抗いがたい傾向にひかれて、彼は表現の手段としてヴィジョンの世界とは相対立する性質の、現実分析とシステム化の方法をえらんだからだ。現実界をしりぞけた理想の生活から、一切の幻想を廃そうとする厳しい現実凝視の生活へと急転し、いずれの場合にも徹することの出来ぬランベールは苦惱と挫折を重ねるばかりである。

システムの方法は、ハ人間喜劇序文Vその他で、作家のとるべき方法としてバルザックが主張しているものである。システムによる統一と綜合の方法は、社会を全体性と秩序の中に描く歴史家であらうとしたバルザックの作家的態度がえらんだものであるが、さらに、ランベールの探究が示すように、それはバルザックの中に深く根ざしている矛盾の解決へのねがいのあらわれでもある。バルザックは、ランベール、フレンホーフェル、ガンバラのように直観的詩人的ヴィジョンをたのしみ、観念の世界における現実からの解放を夢みる一方、ヴィジョンと観念との具象化を強くのぞんだ。

ハパンセは行動より劣る。しかし世界の中に投射されたパンセは

行動以上のものとなる。V（*Pensées, Sujets, Fragments*）パンセと行動、事実とを結びつけること、自己の二重性の解決方法でもあるそれを、バルザックは芸術創造、殊に言葉による創作の中に求めた。

ハ文学の最後の段階は、観念を表象 *image* の中に刻みつけることだ。V（ハ幻滅V）

パンセの破壊作用をのがれる唯一の方法は、言葉によりパンセを具象化することである。なぜなら、人間の言葉は究極の *unité* である神の言葉よりハ発散しV、神の言葉と *analogie* あるいは *correspondance* をもつものだからである。言葉によつて、人間の統一へのねがいは実現される。ランベールは、ハかくて肉は言葉とならんV（ハパンセV）という言葉で、人間の言葉と神の言葉との合一の理想をあらわす。言葉は、人間の分析の達することのできぬ部分だから（ハパンセV）神の言葉を不完全にしか反映することができない。しかし、それでもなお、人間の言葉と神の言葉との間の *correspondance* を解き、解釈することが、芸術家の唯一の存在理由となる。不可能と可能との間の限界を知り、最高の可能性を実現すること、それを目ざす芸術家の制作の生活は、危険と苦しみに満ちている。外には、社会的条件や生の欲望と絶対的集中を要する仕事との間の闘いがあり、内には、抽象の誘惑と具象化の意志との闘いがある。学問の推理の方法が緩慢なヴィジョンであるのに対して、芸術作品を生む方法はハ速やかなヴィジョンVなのだ、とランベールは言う。直観、ヴィジョンとその具象化の過程にハ速やかさVを意識すること、しかも直観やヴィジョンと対立的な具象化の

方法をもったこと、そこに、ランベールの物語を生んだバルザックの、創作生活における最も深い苦しい問題がうかがわれる。孤独と意志と勇氣によつてのみ克服される苦闘の連続であつたバルザックの創作生活は、追放されたダンテの姿によつて象徴されている。

▲家に帰ると異国の人は彼の部屋にとじこもつて、靈感をよびさますランプに火を灯し、夜に思想を、静寂に言葉を求めながら、恐るべき制作の魔に身をうちこんだ。V（▲追放者V）

このような苦しい生活を闘ひぬいた最後の勝利者として、あらゆる栄光、讃辭のもとに描かれるのは、▲人間喜劇V中ダニエル・ダルテス一人である。バルザックはランベールによつて、のりきることとは出来たものの彼の中に潜んでいた鋭い危機感を描き出さずにはいなかった。ヴィジョンと意志力との対立の悲劇であるハルイ・ランベールVによつて示されるのは、結局、バルザックにおける創造の神話である。すべてを説明しようとする合理主義精神によりつつ、最後に未だ解きえぬ謎を示す神秘的表現によつて、それは、バルザックの創造についての解釈の最も深遠な表現となっている。

むすび

青年時代の最後にあたる時期に最も努力をそそいで完成したこの作品の中に、バルザックは、彼自身の知的探究をおりこみ、後に▲人間喜劇序文Vにより的確簡潔に表現される彼の哲学、思想体系を、始めてまとまつた形のもとに表現した。▲ウージェニー・グラндеV（一八三四年）、▲ゴリオ爺さんV（一八三四年～三五年）などレアリスムの小説も平行して完成し、ここに、バルザックの十

八年間にわたる哲学的探究はピリオドをうった。バルザックの作家としてのフォルマシオンは終了した。▲ハルイ・ランベール⁽²⁸⁾は、「哲学研究」における根本図式の最も深いすぐれた表現であるVと考へたものの、バルザックはなお不満を感じ、ハルイ・ランベールVの補ひとなる作品や▲人間の力に関するエッセイVを書くとしたがその意図は実現されなかった。はつきりとレアリスムを目ざす今後のバルザックの作品において、▲哲学研究Vはドラマトゥルギーとして働らくことになる。成熟期の活動の始まりを予告し、▲哲学研究Vの中心でありピークでもあるこの作品は、バルザック研究の泰斗が言つたようにバルザックにとつて、ルナンの言葉▲骨の中の骨、肉の中の肉⁽³⁰⁾をもつてよばれるべきものである。

知的タイプの主人公ランベールの物語によつてあらわされるのは、芸術の第一条件として認識をおき、総合と統一による *art de l'art* を目ざす、バルザックの芸術の意識的な知的な性格である。ランベールの思想の淵源を検討するなら、さらに、バルザックの芸術の原理となつている思想体系が、長い間のぼう大な読書と努力によつて確立されたものであることが明らかになるであらう。また、ランベールはバルザックの心理に深く根ざしていた二重性の問題をさまざまの面であらわし、創作におけるバルザックの *intime* な問題を示し、バルザックの芸術・思想は彼の性格や生活との密接な結びつきによつて生れたものであり、結局バルザックにとつての芸術は生の問題の解決法であつたことを示している。

バルザック自身の問題をこのように表現していると同時に、ランベールには深いアクチュアリテが見られる。思想家ランベールのモ

デルをバルザックはニュートン、カルダン、プロチノスなどに求めたが、合理主義の限界を意識し神秘主義へと移行するランベールは、イデオログから唯心論的方向へ移行していった同時代の人々、カバニスやメーヌ・ド・ビランの精神活動と一致している。バルザックは時代の知的動向に注目しつつ、彼の感じとったすべてをハルイ・ランベールの中にもりこんだのだが、特にメーヌ・ド・ビランはその思想・心理・性格において、ランベールとの類似性が注目されている。精神分裂病者としてのランベールに同時代人のモデルがあったことはすでにふれたが、さらに注目すべきことは、ロマン主義文学の主人公たちの中に、分裂病の一つのタイプがみられることである。アドルフ、オベールマン、オクターヴ（八世紀児の告白）らにみられるこの傾向は、まだ病的とは言いがたいが、ネルヴァルの作品において最も鋭くあらわれているこのタイプはGeorge Ross Ridgeによれば、⁽³³⁾「自意識の主人公」となすけられるロマン主義的主人公の特徴をなす、過敏な感受性と鋭い知性とは対決によって生じたかっとうの、一つのあらわれ社会とのである。彼は、ルネ、エルナニとともにランベールを、ロマン主義的主人公の三典型の一つとしてあげている。混乱の社会に青年期をすごした同時代の作家たちが彼らの主人公のうちに托したものを、バルザックも彼の主人公によって鋭く表現した。これも、バルザックの知性における時代の動きへの敏感さを示すものと言えよう。

注

- (1) 一八三三年この作品は「Notice biographique sur Louis

Lamartine」と題された。翌一八三三年版では「Histoire intellectuelle de Louis Lamartine」と改題され、一八四五年の決定版において「Louis Lamartine」となる。

- (2) 一八三二年から一八四五年まで7度版を改めたこの作品はその度に大きな修正が加えられた。M. Bardèche, J. Pommierの「édition critique」により、作品の内容・性質を大きく変えた最大の修正は、一八三五年に行われたことが明らかにされた。それで、作品の実際に書かれた時期を、一八三二年（三五年と考える）

- (3) 周知のようにバルザックが一八〇七年～一八一三年に在学したオラトリア教団のコレージュである。

- (4) これについての検討は、M. Bardèche「Autour des Etudes philosophiques」(L'Année balzacienne 1960)に詳し。

- (5) Préface du Livre mystique (1835)

- (6) はとんどの研究家がこの点で一致し「mystique」と occultisteとの相異を論じている。

- (7) 合理主義科学に支えられながらバルザックの思想の中心は Sciences Occultes である。彼は、メスメル、ジョシュフロワ・サン・チレルなど彼の好む科学者たちを、古代、中世の Sciences Occultes の近代における後継者であると考え、新しい学問である人類学は Sciences Occultes より生まれるであろうと述べている。（「従兄ボンス」）

- (8) P. Laubriet「L'Intelligence de l'art chez Balzac」

- (9) ヴィクトル・ユグの型 A. Devic, G. Morin 及び Dr. Lotte の論文を参照。
- (10) H. Claude ; J. Lévy-Valensi < Un schizophrène dans la Comédie humaine >, H. Evans < Louis Lambert et la philosophie de Balzac > と紹介をなしているのを参照。
- (11) フレデリック・バリエッタは神経症と精神病（クセジヤ文庫）は、精神分裂病者の論理的・非現実的発展が、純粹に形而上学的の面にならざる芸術にまで高められた例としてヘルマン・ランベールをあげている。
- (12) H. Evans
- (13) J. Borel < Personages et destins balzacien >
- (14) H. Evans
- (15) タンランテス公爵夫人への手紙
- (16) Préface du Livre mystique
- (17) < Lettres à l'Etrangère >
- (18) “
- (19) < Des Artistes >
- (20) “
- (21) < 従妹ヘンリエット >
- (22) < ヴァンサン・ミ・エリ >
- (23) < 従妹ヘンリエット >
- (24) < 芸術家論 >
- (25) Lettre à Hippolyte Castille

- (26) ベンジャミンの芸術論と「うつせみ」 M. Eigeldinger < La philosophie de l'art chez Balzac >
- (27) < カンタリヤン公妃の秘密 >
- (28) 特ダランベールのペリカンの手紙。
- (29) F. Davin < Introduction aux Etudes Philosophiques >
- (30) M. Bouteron, J. Pommier の著である。
- (31) 一八三二年版に、ベンジャックは彼らの名をあげているが、決定版からは削除した。
- (32) H. Evans
- (33) George Ross-Ridge < The hero in French romantic literature >